



TITLE:

京大広報 No. 157

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 157. 京大広報 1978, 157: 749-756

ISSUE DATE:

1978-04-15

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209532>

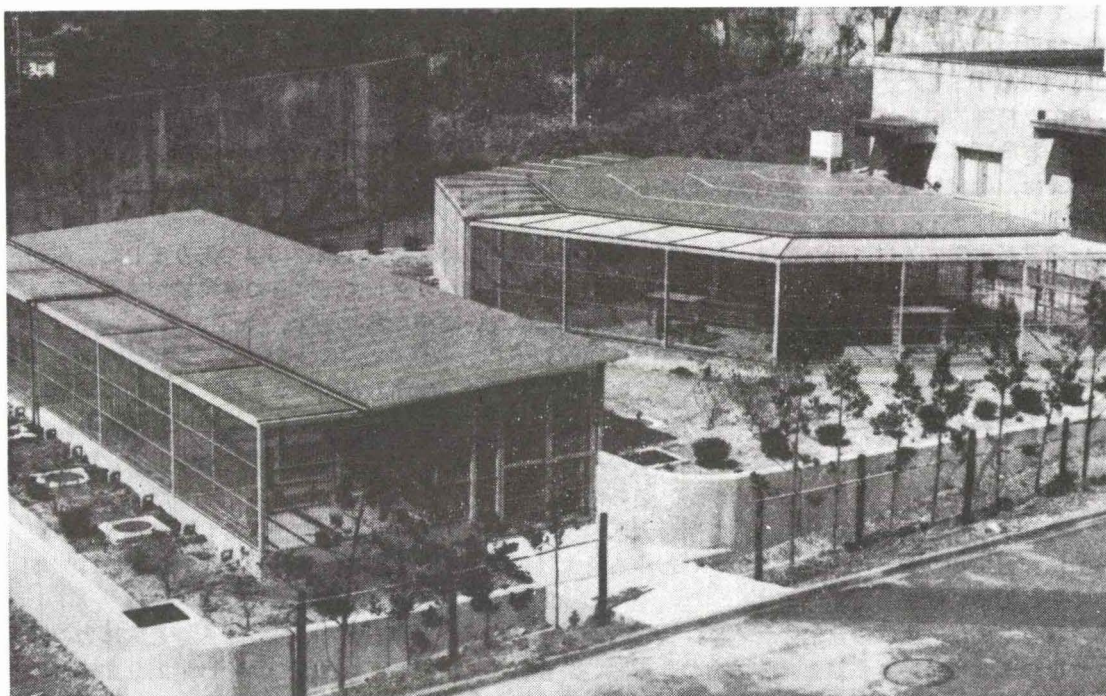
RIGHT:

ファイル中には未許諾による非表示部あり.

京大広報

No. 157

京都大学広報委員会



霊長類研究所附属・サル類保健飼育管理施設の飼育ケージ

——関連記事本文8ページ＜紹介＞——

目 次

卒業式における総長のことば

総長 岡 本 道 雄……………2

京都大学創立七十周年記念事業の経過……………5

数理解析研究所伊藤 清教授が恩賜賞・

日本学士院賞を、西村秀雄名誉教授が

日本学士院賞を受賞……………5

農学部附属演習林長の交替……………7

＜随想＞

敗戦で傷手をうけた京大での思い出

名誉教授 上田弘一郎……………7

＜紹介＞サル類保健飼育管理施設……………8

日 誌……………8

卒業式における総長のことば

総 長 岡 本 道 雄

本日ここに来賓の名誉教授、各部局長、教職員並びに御父兄各位のご出席を得て、昭和52年度の卒業式を挙行し、2,422名の若芽のような諸君を社会に送り出すことは、諸君や私共の慶びに止まらず、我が国の社会にとっても大きな力となることであります。昨日は修士学位授与式で874名の修士を送り出し、また本年度中の京都大学よりの博士号授与者は昨日の授与式で合計417名となりました。したがって京都大学は本年学士・修士・博士合計3,713名、4,000名に近い人達を社会に送り出している訳であります。

諸君の小学校から本日までの16年または医学部の18年は、世界的には勿論日本にとっても激動の時代でありました。日本の社会は一応戦後の窮乏から脱却していたとは申せ、それぞれ困難な環境の中を精神的にもまた経済的にも諸君を支え、今日を得させられた御父兄皆様の御苦勞を偲び、心からお慶び申し上げます。

また、御父兄以外にも、諸君を大切にされて来られた諸先生・知人の方々にも、心からおめでとうと申し上げます。

諸君が本学に入学されたのは、医学部では昭和47年、他の学部では昭和49年でありました。昭和49年は私が初めて総長としてこの席でお祝いを述べた年でありまして、本日の卒業式で諸君を送ることが出来ますことは、私にとりまして、誠に例年にない喜びであります。



思いおこしますと、4年前諸君の入学式に当たって私は、学問の自由を守るための大学の自治は京都大学の創立以来多くの先輩の努力によって確立されたものであることと、大学の自治のためには外部からの学問研究への干渉を排除するのみでなく、大学の自治の実体としての学問・言論の自由が大学内部で守られているか否かが、さらに厳しく問われねばならないと申しました。

それから4年間、私は諸君と共に京都大学の現実を生きてまいりました。はたして京都大学の実情は如何でありましたでしょうか。いわゆる竹本問題を始め、多くの困難な問題で京都大学は大きく揺れてまいりました。

私としては、大学の自治のために、大学の手でその秩序を回復しようと多くの人達と共に力の限りをつくしてまいりました。時に力つきる思いがしたことがありました。今、その期間を共にした諸君を送り出すに当たりまして、感慨つきぬものがあります。

「歴史上、一国が栄えた時、そこには世界の先端をゆく優れた大学があった」というのは、クラーク・カーの言葉であります。逆に一国の主要な大学が病んだ時、その国の知的活力はどうなるでございましょうか。

「炎天や狂わずにあれ時計台」。これは法学部佐々木惣一先生が昭和8年の滝川事件で同僚教授と共に京都大学を去られた時の句であります。諸君が本日母校を去られるに当たり「母校よ健在であれ」と諸君と共に祈りをこめると共に、明日よりは京都大学の卒業生として社会のあらゆる分野に出発される諸君に一言銭の言葉を送りたいと思います。



諸君は、一般に幼い時から良い子、利潑な子として育てて来ています。周囲の人達も戦後の家庭および学校教育の通弊として諸君を甘やかしています。これは何も諸君に限ったことでなく日本国民一般についても言えることで、甘えの国民性とか、甘えの時代と言われていますが、特に諸君が学校生活を送られた期間における実社会は、戦後の窮乏の時代と異なり、高度の経済成長による豊饒な文明の世界でありました。文明の方向が一般的にそうであるように、昨今の現実は何事にも便利なよう人間の欲望には逆らわぬよう万事抵抗の少ない環境の中にありましたし、また民主主義の

初歩として自己の責任よりも権利の主張に重きが置かれました。また一口に16年間という学校生活には常に共通のパターンがありまして、そこには常に先生があり、教わり、試験があり、進級がありました。その間何よりも大きいのは常に両親の保護と、一貫して実社会から遊離しているための甘えがありました。

特に京都大学に入ってから、意識するとせざるとにかかわらず京都大学に入ったという優越感と、学風として自由を尊ぶところから来る解放感とが一緒になって誠に自由な世界を生きて来ました。一般に言って自由な用意された世界、受動の環境でありました。一貫してこのような過去を送って来た諸君としては伸び伸びとした素直さはあるとしても、困難に処して鍛練した経験に乏しく自己の確立に弱く、自己の能力の評価において安易なおごりがあります。勿論諸君皆がそうであると言うのではなくて一般的な傾向として申すのでありますが、少なくとも極めて保護された環境で育って来たことはよく自覚されねばなりません。しかし明日からは違います。諸君のために用意された世界ではありません。そう勝手気ままには振舞えませなし、保護はないと覚悟せねばなりません。矛盾、相剋、不安の常に渦巻く世界です。諸君の選ぶ職業がそれぞれ違うのに応じて、その環境も一人一人違うと共に又一つの環境も変転します。

これからは、この中を諸君は自らの才覚で歩んで行きます。用意された環境で得たものの中で何がこの激動の中で通用するかであります。かつてなら京大卒で通りました。今日では学歴社会の弊害が大きく叫ばれています。まして今後世界に出て行く諸君は出身大学だけでは通用しません。身についたもので戦わねばなりません。

大学は何よりもまず知識の生産と伝達を行なっています。諸君はまず大学で教わった知識を持っています。しかし、情報化の現代では、情報の洪水の中で昨日の知識は今日通用しないものがあります。免状や卒業証書の通用しない時代であります。また一般に知識は力なりと言われ、近代における大学の発展の根底には人間の知識の力に対する一種の楽観主義がありました。大学の権威は学問知識の有用性と同時に、学問を行なう人間の人間性への信頼を前提としていたと思います。

しかし、昨今のいわゆる公害を始めとする社会の実態は、知識は良き力でありうると共にまた悪しき力でもありうるのであって、知識が我々にとって良き力でありうるのは、知識の内容もさることながら知識の主体にかかわっていることを教えています。



この点につきましては、大学入学の時、大学の教育は知識そのものを受けとるのではなく、批判をもって考えることであると申しました。学問とは事物に即して人間の精神の働くことであるが、言いかえれば事実を直視して人間が考えることであります。考えるとは、一旦止って軌道修正を行なうことであります。その修正は、学問の目的から言って本来人間性の方向であります。これは各人の価値観の問題でもあります。この点学問を通じて人間の価値観を練り直すことを目的とする大学4年間の教育が、はたして如何ほど実際の効果を持ち得たかを思い、知識の主体である人間の形成という点で私は現在の大学教育の限界を感じると共に、大学以前の教育の重要さを痛感しているものであります。

またさらに、一国の興る時そこには優れた大学があったというクラーク・カーの言葉を引用しました。彼がこの言葉を述べた時にはドイツの興隆やアメリカの発展が頭にあったと思います。しかし、すでに一旦近代化に向って離陸して発展をとげた我が国などがこれと同じく大学のみによって浮沈が決まるものではなく、この言葉には前世紀の大学の権威についての理想主義的過信があると思います。

なるほど大学は一国の文化・国力の象徴であり、因となり果となりその国の活力を養ってきている事は事実であります。

しかし、現在では、このクラーク・カーの言葉の中には大学の持っていないもの、持つことのできないものまで大学に帰属せしめられている気持がします。何となれば一国の活力に対してはこれと同様のことが、程度こそ違ってもその国の政治、経済、芸術、宗教その他万般の事柄に関しても言えるのではないかと考えるのです。昨今学問研究さえも大学におけるもののみが唯一で絶対であるとは言えないかもしれません。つまり国民の力はいっとも総合的に生み出されるものでありましょ

う。この点、大学は過去の権威の上に乗って驕ることはできませんし、諸君は今日大学を出るに際しては、社会全般をその視野に入れて謙虚に出発して欲しいと思うのであります。

特にこの観点に立って我が国の現代の教育一般と大学の実情をみます時、偉大な国民の育成と我が国民百年千年の幸福の基盤たりうるかについては十分考えなくてはならないと思うのであります。



これから諸君は社会の中に出て行きます。社会の学術・政治・行政・経済・芸術・宗教の真只中に出ます。ここで諸君が真に大学を出た者として評価されるとすればそれはどういうことでしょうか。

大学はさきに申しましたように知識の生産・伝達、総じて知識を中心とした営みにその真髄を持っています。その知識の根は人々の生活の中にあったこと、生活に即して人間の精神が構築したものであること、学問や大学の権威はそのような幾百年幾千年の苦闘で一つ一つ築き上げられたものであることを思い、その学問の権威の上に乗るのではなく学問生成の跡をふり返ってその原点に帰り、実生活の中で学んで欲しいと思うのであります。諸君が苦労して自らのものとした学問知識あるいは技術を、これからの現実との出会いの場で常に鍛えて欲しいと思うのであります。この実生活で学ぶ謙虚な姿勢こそ大学の精神であり、実社会において諸君がこの姿勢をとるその程度に応じ、その持続の限りにおいて諸君は創造に参与し諸君自身が伸びることになりましょう。

大学を卒えるということはそのようなことの実践への出発であります。御承知のように卒業をコンメンサメントと呼ぶのはそのような意味でありましょう。

全教育課程16年、京都大学4年の修業は諸君が実際の社会に出て現実に即して学び、考え、新しく生むことで花と咲くものであります。これはまた大学を出た者の義務であり、大学が尊敬を受けて来たのは、そのようなものが期待されるからであります。重要なだけに大変な仕事ですが、諸君はやらねばなりません。



次に私は、医学部出身でありますので、一言最も具体的なこととして体を大切にされるようつけ加えておきます。

私は、医学の中でもその専門の立場から肉体と精神のかかわり合いを知っています。肉体そのものが精神力の根源である機構を知っています。記憶・認識・判断等凡そ知力といわれるものは勿論のこと、勇氣・決断・寛容・希望といったものもすべて健康な肉体から生れます。これら精神力・バイタリティの基礎は全身の筋肉、内分泌、栄養、総体として肉体の力と呼ばれるものから生れます。さきに私は、学問することは、物に即して考えること、止ることであると申しましたが、この精神活動は、大脳の一部前頭葉の総合野の働きと申しています。これはコントロールであり、精神作用の方向としては抑制であります。脳の構造と機能をみますと、神経細胞のレベルでも、また脳全体としても促進と抑制から成っています。

諸君が今後の人生に乗り出される時、強い精神力を要求されますが、それは実は強健な肉体から生れるものであることを銘記して欲しいと思うのであります。しかも強い精神力と申しますのは、十分抑制のきいた積極性というものであります。止ることを知った、また止ることの出来る推進力であります。凡そ不道德といわれるものは止まることを知らぬ、抑制の欠如の産物であります。この点人格の理想についてプラトンも勇氣・知力・正義と共に、特に節制の重要性を強調しているのであります。ルネサンス期のベニスの書店アルダスの商標は、推進力を表わすイルカに、抑制を示す強力ないかりが配してあります。

何卒十分体を大切に、抑制のきいた知力ある人となって欲しいと思います。体も勇氣などと同じく日常の積み重ねが大切です。体を大事にすることを知ることです。諸君は望むと否とにかかわらずそれぞれの組織のリーダーとなる人ですが、健全な体から来る優れた知力・バイタリティと共に抑制のきいた寛大な思いやりのある気持を持たれることがどれほどその世界を、また一家を明るくするかわかりません。今日ほど、人権や福祉が多く叫ばれるにもかかわらず、具体的なお互の関係がとげとげしく苛烈な時代はないように思います。まず、自らが強健な体を作り豊かな気持をとりもどすことが大切でありましょう。諸君が人生の峰々に立った時、常に豊かな体力から生まれ

る知力と寛容な気持で戦えるようではなくてはなりません。

誠に烈しい時期の京都大学の生活を共に送り得ました者として、諸君に対し、限りない友愛と、信頼と期待を以って、今日諸君を社会に送り出すものであります。諸君の多幸を祈って饒の言葉とします。



＜大学の動き＞

京都大学創立七十周年記念事業の経過

本学創立七十周年記念事業の経過については、京大広報 No.44, No.123 等で報告してきたが、かねてから懸案であった大学会館の建設については、京都大学創立七十周年記念事業後援会（以下「後援会」と略す）において引き続き検討され、このほど漸く実現する運びとなったので、その経緯等について報告する。

後援会は、昨年3月7日、常任理事会を開催し、京都市左京区吉田川原町所在の関西電力株式会社所有地の一部を約2億円で確保し、同地に「京大会館」を建設すること、ならびに同会館の設置および維持経営は法人組織とすること等について決定したうえ、同年3月10日、土地所有者との間で正式に売買契約を締結した。

また、後援会では、かねてから大学会館の建設に関し、その規模、設計等の具体案の検討をすすめていた京都大学創立七十周年記念施設建設委員会の構想をもとに建設することを決定した。

京大会館の概要は、次のとおりである。

建設場所	京都市左京区吉田川原町15番地
敷地面積	1924.51㎡
建設面積	1113.26㎡
延床面積	3445.26㎡
構造	鉄筋コンクリート造
	地下1階、地上3階
設備	大講堂（200人収容） 会議室（大小あわせて16室） 宿泊室（11室、16人収容） レストラン、その他
工費	6億円

この京大会館は、各種の学会、学術講演会、研究会など、諸会合の利用に供され、学術研究活動の活発化を推進することを目的とするとともに、本学の同窓会館的な機能に重点がおかれるものである。

一方、法人の設立については、後援会常任理事会の決定によって、直ちに財団法人京大会館楽友会設立発起人会が開催され、法人設立に必要な諸事項について決定され、着々準備がすすめられて、昨年9月12日文部大臣の設立許可を得て、ここに「財団法人京大会館楽友会」が発足した。本学総長が理事長となることとされている。この法人は、京大会館の設置および維持経営、学術講演会等の開催のほか、同会館を本学、本学教職員または本学同窓生による諸会合の利用に供する等の事業を行ない、これによって本学における学術研究活動の発展に寄与することを目的としている。

なお、財団法人の設立に伴い、後援会から資産として、土地1924.51㎡のほか、現金7億3,510万2,000円が寄附されている。その内訳は、基本財産3,000万円、運用財産4,600万円、建物建設資金6億5,910万2,000円（設備費を含む）である。

以上のように、京都大学創立七十周年記念事業として、残されていた大学会館の建設が進捗し、また、これを設置し維持経営にあたる財団法人の設立をみたのであるが、その後、昨年12月14日建設地において、本学、後援会、法人各関係者および地域住民代表者等多数出席のもとに起工式を举行し、目下、建築工事を着々とすすめている。竣工は本年10月の予定であるが、この会館の建設をもって後援会としての所期の事業はすべて完了することになる。

＜部局の動き＞

数理解析研究所伊藤 清教授が恩賜賞・日本学士院賞を、西村秀雄名誉教授が日本学士院賞を受賞

このたび、本学数理解析研究所伊藤 清教授に恩賜賞・日本学士院賞が、西村秀雄本学名誉教授

に日本学士院賞が授与されることになった。授賞式は、6月上旬、日本学士院会館で行なわれる予定である。

以下に各氏の略歴、業績等を紹介する。

伊藤 清教授

伊藤教授は三重県出身、昭和10年東京帝国大学理学部数学科を卒業、内閣統計局統計官を経て、



昭和18年名古屋帝国大学理学部助教授，同27年本学理学部教授，同41年本学数理解析研究所教授となったが，同42年退職され，デンマーク国オルフス大学教授，同44年アメリカ合衆国コーネル大学教授の職を経て，同50年本学数理解析研究所教授に

再び着任された。同51年数理解析研究所長となり，現在に至っている。

教授の今回の受賞の対象となった研究題目は，「確率微分方程式の研究」である。各瞬間に偶然的要素が介入する現象の記述には，確率微分方程式が用いられ，統計物理学，工学，生物学，経済学などに広く応用されている。この理論の基礎は，教授が昭和19年に発表された「確率積分」と，その発展として同27年に発表された「確率微分方程式論」によって与えられた。それ以後今日に至るまで，つねにこの分野の研究に指導的役割を果たして来られ，この方面の研究のなかに教授の名を引用していないものはない。因みに，昭和48年に発表された経済学者サミュエルソンの「投機価格の数学理論」も伊藤理論の解説を含んでいる。確率微分方程式の理論と応用の発展は最近も著しく，昭和51年7月には国際シンポジウムが本学数理解析研究所で開かれ，国内国外の研究者百数十名が教授の理論を中心として活発な研究発表討論を行なった。

この業績により，教授はすでに本年の朝日賞を受賞している。

教授の業績は，このほかには数学の広い分野にわたっているが，教育の面でも教授の貢献は大きい。上記の略歴にあるように，多くの大学に奉職し，多くの優秀な研究者を指導育成された。直截的に本質に迫る教授の独創的な方法とその輝かしい成果は，国際的に非常に高い評価を受けている。

以上のような研究・教育の両面にわたる業績を考えると，教授の今回の受賞はまことに喜ばしい。

(数理解析研究所)

西村秀雄名誉教授

西村名誉教授は京都府出身，昭和10年京都帝国大学医学部を卒業，同年京都帝国大学助手（医学部解剖学教室），昭和15年京都帝国大学附属医学専門部教授，昭和21年京都帝国大学助教授（医学部解剖学教室），昭和30年京都大学教授になり，解剖学の教育研究に尽力された。昭和51年本学停年退官後は，財団法人実験動物中央研究所で学術

顧問として研究を続け，現在に至っている。

同教授の主たる業績には，人体の正常および異常発生学，実験奇形学に関するもので，「先天異常」という解剖学のみならず，多くの基礎および臨床医学と密接な関係をもつ，広汎な領域での幾多の研究成果がある。

初期は解剖学の多方面の研究に従事されたが，漸次環境と体質という問題に関心をもち，戦後はマウスを用いて異常発生に関する実験的研究に専念され，種々の外因特に化学物質の胎児に及ぼす影響とその発現条件について広汎な検索を進め，また母体への種々の処置により他の外因の催奇形作用が軽減せしめられるなど，奇形の予防についての基礎的研究を行なわれた。ついでラット，ウサギ，サルなどを用いる比較実験奇形学的研究を發展させた。

一方，約4万にも及ぶヒトの胎芽・胎児を蒐集し，異常の検索と遺伝要因ならびに妊娠中の母体条件との関係についての疫学的研究をも進められた。特に妊娠初期の胎芽（胎生3～8週）の蒐集は世界一の規模のものであり，これらの標本は昭和50年に新設された医学部附属先天異常標本解析センターに移管され，国内のみならず外国の研究者にも利用されている。この胎芽の系統的調査はどの国でもかつて行なわれなかった極めて特異なものであった。すなわち，胎芽における種々の奇形の頻度は新生児の対応値より数倍以上も高く，多くの奇形児は出生までに死滅していくとの推論を裏付けた。また奇形成立に関与する種々の要因との相関を明らかにし，環境因子の催奇形性のモニタリングに胎芽を利用することの有用性を主張された。さらに，種々の奇形の初期の発生過程や，正常発生における基準値など日本人における新しい所見を次々と発表し，また，細胞遺伝学，細胞化学，免疫化学的研究，薬物の胎盤通過と胎児内蓄積などの胎生薬理学的研究など，斯界の先端をゆく研究を数多く展開された。このような研究の究極の目的は，必ずしも稀でない先天性心身障害児の発生の予防にあり，その困難な目標に対し基礎的でかつ重要なヒトにおける資料を提供するものとして，高い国際的評価を得ている。

その他の活動として，昭和36年日本先天異常学会の成立に尽力され，長年常任理事を務め，昭和38年以来厚生省中央薬事審議会委員として，医薬品等化学物質の安全性の検討に参与し，昭和43年



< 紹 介 >

サル類保健飼育管理施設

霊長類研究所附属サル類保健飼育管理施設（以下「サル施設」と略す）は、霊長類研究所の研究者および全国の共同利用研究員のために、実験用サルの供給と飼育・繁殖を担当し、同時にそのための基礎的研究を行なうことを目的として、昭和44年に設置された。

昭和42年の研究所設立当初は、所内で独自にサルを飼育保有する計画がなかったため、実験用サルの入手難から研究に支障の生じた時期もあったが、2年おくれで設置されたサル施設は、スタッフもサルも研究棟の地下に仮寓のまま数年を過ごした後、46年に至って、独立したサル施設棟、検査舎、放飼場、浄化槽、焼却炉等が建設され、漸く体裁の整ったものとなった。こうした中で、研究部門からの技官定員振り替えやサル施設定員増を経て、現在、助教授1名、助手2名、技官7名（うち1名は臨床検査担当）、非常勤職員3名（事務・調餌・洗濯・消毒担当）で業務に当たっている。

施設棟ケージ室は空調され、照明スイッチや給水装置は自動化されていると共に、数か所に設置されたテレビカメラによって、随時サルの監視・観察が行なわれている。研究所で飼育されているサルは全て個体簿に登録されており、生年月日や両親の名前、実験使用歴・繁殖成績などが1頭ずつのカードに記録されている。

研究者への実験用サルの供給は、毎年60～70頭にのぼっているがこのうち約半数は外国産のアカ

ゲザルで占められている。これの輸入・検査はサル施設の重要な業務の1つであるが、結核・赤痢・各種ウィルス病などヒトと共通の病気が存在するため、獣医師で診療をも担当する教官、飼育を行なう技官とも神経を使う仕事である。

近年、世界のサル類はその自然生息数が次第に減少してきているが、ポピュラーなサルであったアカゲザルも、主要輸出国であるインドが厳しい輸出制限を行なうようになってきており、外国産サルの購入は年々困難の度を増している。この問題の解決には、輸入に頼らずに自給できる繁殖コロニーの保有が不可欠なのであるが、予算、人員とも不十分なため、輸入と併行して、必要規模の約3分の1の母群で細々と自家生産を行なっているのが現状である。こういう状況の中で、サル施設で行なわれている研究も繁殖の基礎的分野の攻めに重点が置かれており、精子形成機序や人工受精・内分泌等の諸テーマを主に、眼底像、血液性状、微生物など、サルの健康に関する問題も追求されている。

研究所で飼育されているサル類は、52年度末で26種450頭にのぼり、共同利用研究員の広汎な実験需要にもかなりの程度こたえられるようになってきたが、最近は妊娠日令のはっきりした胎児や新生児を使いたいという希望も増えており、頭数の問題と共にサルの質的要求にも対応する必要が生じてきた。自家繁殖態勢の整備が何よりも切望される昨今である。なお、施設運営の円滑化をはかるため、所内にサル委員会が置かれている。

（霊長類研究所）

日 誌

（1978年3月1日～3月31日）

3月3日～5日

入学者選抜学力試験

7日 評議会

9日～10日

医療技術短期大学部入学者選抜学力試験

13日 ザール国 ザール大学総長 Tshibangu Tshishiku氏および同大学国際関係協力局長 Akwesi Ngobaasu 氏来学

ペルー国立地球物理学研究所長 Alberto A Gieseckek 氏来学（14日まで）

14日 安全委員会

15日 国際交流委員会

17日 原子炉実験所学術講演会

18日 アメリカ合衆国カーネギー高等教育政策研究所副所長 Verne A Stadtman 氏来学

3月20日 建築委員会

医療技術短期大学部卒業式・専攻科修了式
アメリカ合衆国デュポール大学 Howard Sulkin 氏来学

22日 同和問題委員会

23日 学位授与式

メキシコ国メキシコ大学アジア・北アフリカ研究センター長 Manuel Ruiz 氏人文科学研究を訪問

24日 卒業式

25日 タイ国教育省事務次官 Rangsi Chaosiri 氏来学

27日 附属図書館商談会

創立70周年記念後援会助成金選考委員会

28日 評議会

大学院審議会